

GreenThumb



Who is Greenthumb??? 2

心のビタミン・INTERVIEW 佐々木フサ ... 3

ランドスケープ交流会 in 札幌
北からのメッセージ 4

グリーンサム・レポート 8

国営みちのく公園／セリオンリスタ
／北欧の杜公園／能代市 市川邸

TOPICS 10

- ・グリーンマネージメントプロジェクト
ふるさと村／園花苑
- ・むつみ造園・土木エンジニア紹介
- ・あとりえ グリーンサム

MUTSUMI COLLECTION プロの道具 ... 12

2003年
夏号



Who is Greenthumb???

花と緑を愛し、人と人との出逢いを求めて

(/花と緑に囲まれて過ごす、とっておきの時間。)

不思議なゆびでいろいろなものに触れ、花と緑をいっぱいにして人々の心をなごませた、その少年のように花と緑の好きな人を総称してグリーンサムと呼んでいます。

花や緑の楽しみ方は人それぞれ違うものですが、いかに大切であるものなのか…今さら言うまでもないでしょう。今までの花や緑を買ってきて鑑賞する、見るだけの楽しみ方から自分で触れ、育て創っていく楽しみ方に変わりつつあります。

グリーンサムクラブは、花と緑を多くの人たちと共有していこう!というネットワークです。エクステリア・ガーデン業界に携わる、街並みづくりの経験豊かなスタッフをはじめ、街を花や緑でいっぱいにして心豊かに過ごしたいという共通の想いを持った団体・個人の集まりです。忙しい毎日に流されてしまいがちな私たち。ふと立ち止まって花や緑にふれあったり、花や緑に囲まれながら人との交流をしたり、楽しい時間をつくっていきたくと想います。

自宅の庭先から街角に、公園へと私たちの身近な自然から、いずれは地域全体が「グリーンサム」でいっぱいになれば…と願っています。

秋田グリーンサム憲章

私たちは
花と緑の生活を楽しむ人々が集い、
交友を通して、友情と信頼を深め
真の豊かな、質の高い暮らしを希求します。

私たちは
秋田が花の鮮やかな色彩や、
木々の多彩な緑が実感できる、
品格ある地域社会づくりに努めます。

私たちは
秋田の自然のすばらしさを守り育み、
自然と人間が共生する、
環境創造と世界平和に貢献します。



秋田グリーンサム倶楽部
秋田市川尻御休町4-27
TEL 018-866-5536

雨の日も風の日も…。

この「あとリエ・グリーンサム」は、インドアとアウトドアが一体となり、雨や風を気にせずに、いつでも利用できる造りになっています。

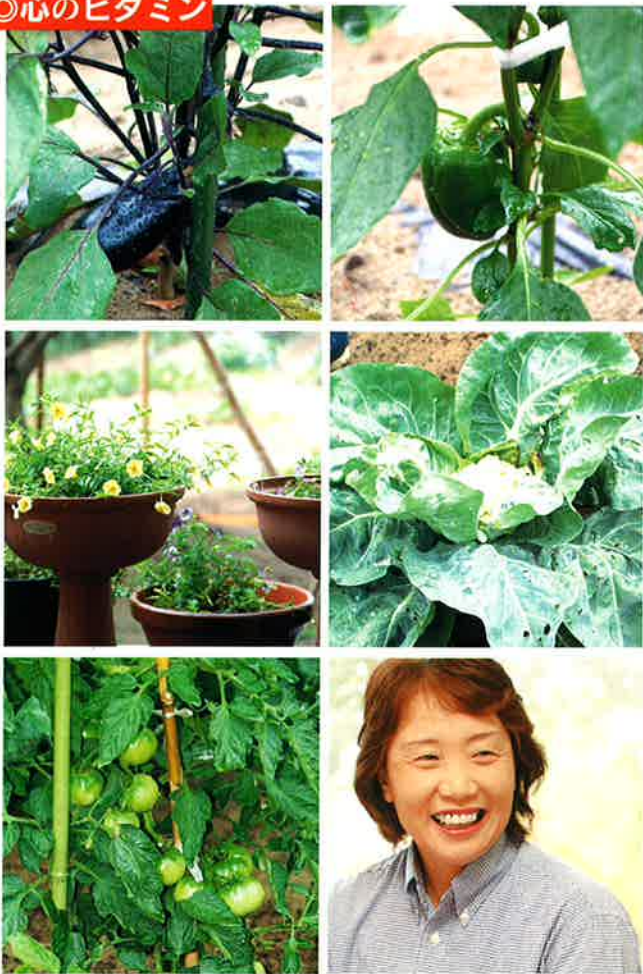
室内のフロアと土間や外の芝生が同じレベルになっていて、内から外へ、外から内へと発想と行動をスムーズに展開できます。各種講習会や展示会などにご利用ください。



あとリエ・グリーンサム
南秋田郡天王町天王字棒沼台306 TEL018-878-3986



◎心のビタミン



◇家族に新鮮で安全な野菜を食べてもらいたいという佐々木さん。これがスローフードの考え方で、スローライフだと言える。



I N T E R V I E W

「育てる楽しさ」「食べる喜び」
野菜づくりで広がる和の輪

天王町◎佐々木 フサ

「もぎたてのトマトが食べたいな〜って言った主人の一言が、野菜づくりを始めるきっかけだったんですよ。」と笑いながら話す佐々木フサさん。それが4年前。青々とした芝生の庭から畑へと変身。今では常に10種類以上の野菜を育て、新鮮で安全な野菜たちで食卓をにぎわせている。買って来たものとはひと味もふた味も違う大地の味。おいしいと言ってはおほる家族の笑顔に、また畑の作業が楽しくなる。

野菜づくりの魅力は「育てる楽しさ」と「食べる喜び」。佐々木さんは早朝から畑をひとまわり。家の前がすぐ畑なので、いつでも野菜の成長を見守ることができる。毎日野菜の顔を見るのが楽しいと言つ。

「子どもと同じで愛情いっぱい育てると野菜はそれに応えてくれるんですよ。話しかけながら水やりした日はいつもより大きく育っているような気がします。不思議ですよね。」
キュウリ、ナス、カリフラワー、大根、トマト：

「以前旅行先の畑で、農業で真っ白になった野菜を見た時のことを思い出すとソツとします。家族のために新鮮で安全な野菜を口にして欲しいという思いからも、野菜づくりはやめられませんがね。おいしいと言ってもらって楽しく食事している時が最高の時間です。」

今、特に凝っているのは家族みんなが大好きだというスイカ。オレンジスイカやダンススイカ、ハワイのスイカまでもある。実がついた順に番号の付いた棒を立て、収穫の時を楽しみに待っている微笑ましい光景は、佐々木さんの野菜に対する愛情の深さに感じられた。

さらに野菜づくりで近所の方々と情報交換するなどのコミュニケーションも盛んになったという。楽しみが多い、まさにスローライフだ。



「やっとここまで大きくなったんですよ！」と笑顔いっぱいの佐々木さん。



キッチン横のデッキから見渡せる佐々木さんの畑。食べる直前に野菜を収穫しています。

北からのメッセー

ランドスケープフロンティア（ビューティースローライフの実現）

「スロー」は
北海道の大地にあり。

浦井史郎（以下敬称略）：今日のシンポジウムは北海道のランドスケープの大きさと奥深さを道産子であるお三方をお迎えして議論しようと思います。環境雑誌「ソフトコート」の小黒編集長もお見えですね。今日のキーワードであります「スロー」ですが、最近スローライフ・スローフードという言葉が盛んに使われています。スローフード協会の公式宣言を読みますと、我々のランドスケープの世界と似ている。

●スローフード宣言

我々がスピードに束縛された結果、我々の伝統的慣習が古い、家庭のプライバシーが侵害される等、ファーストフードを食する事がいられる共通のウィルス、ファーストライフに我々々は感染してしまっている。この危機に対して我々はただひたすら突き進むスピードから自らを解放させなければならない。そのためには感性の喜びをいつまでも持続できる楽しみを保証するワクチンとしてスローフードを導入し、まず食卓から反撃をすべきである。郷土に根ざした料理の風味と豊かさを再発見し、思考を貧困化させず文化として成長させ、かたつむりのよ

うにゆつくりと住みながら国際的に手を繋ぎ、運動を共有しつつよりよい未来にむけ多くの支持者達を広く募る。

ランドスケープの世界でもという形で国民なり社会に貢献しているのかといえは、まさにここに謳われておりますファーストライフという急いだ生き方に対して、常に公園なり緑地などを通して我々がブレイキをかけながら美しい生活を実現しようとする努力にほかならない。かつて大分県で一村一品運動が起きましたように、農業生産物のグローバルイズムがどんどん進行する傍ら、地域固有の食にこだわる文化が芽生えてきた。これは造園の世界でも同じで、世界最古の造園書平安初期の作庭記には橘俊綱の「乞はんに従え」という教えがあります。これはその土地の習いに従えようという意味だろうと思います。その土地の風土性に根ざした風景、そして景観造り。その文脈を忘れてしまつては満足できるランドスケープの技術を発揮できないと考えています。最も日本の中にいてスローな空間の資質をそなえた北海道のランドスケープをどう構築していくのかをお三方にご提言していただきたいと思ひます。

「花新聞」という存在が示す
道民と自然のつながり。

かとうけいこ：花新聞のオープンガーデン特集号は、自分のお庭をとて美しく作っている方々の好意によって成り立っています。北海道のオープンガーデンは全国の中でも非常に先進地であると言えます。今年3回目のオープンガーデンでは130名の個人の方が参加してくれました。庭を介して初めて会った人同士でも花が好きと言う共通点があるせいか、すぐに交流が生まれていく。そのお庭で庭主と訪れた方が一緒に撮った写真を差し上げたりとか、ソフトな部分の交流が広がっているのが当初オープンガーデンを始めた時には思ひもよらなかつたあたたかさです。本州の方によく聞かれるのは北海道の「恵み野」って花の町だよって聞かれます。確かに恵み野は花が有名で観光客がたくさん訪れる町。でも網走管内の清里町には斜里岳という壮大な山があります。その山を背景にして手前にコスモスが広がる景色を見たときは、こんなすごい景色があったのかーと北海道人の私でも思いました。道外、海外からいら



浦井史郎【雅之】(Shiro Wakui)

東京都出身。造園家。桐蔭横浜大学生命環境工学研究機構長・教授。大学では緑や花のもたらすストレス低減の効用の研究と、生命・医用工学分野のプロジェクト研究の総括マネジメントを行っている。最近EXPO2005「愛・地球博」のランドスケープ・コーディネーターに就任。今、その計画に取り組んでいる。またTBS、サンデーモーニング等にセミ・レギュラーとして出演する等、テレビを通じ造園家として今まさに注目の人物である。

写真下／緑を楽しむ情報紙 花新聞ほっかいどう
2段目より下／花新聞に掲載された、地域の花風景。
庭を楽しむ人々の喜びが伺える。



かとう けいこ



かとう けいこ (Keiko Kato)

北海道足寄町出身。
花新聞ほっかいどう(道新スポーツ発行)編集長。ライターとして活動しながら北海道通産局(現経済産業局)非常勤消費者相談員も勤める。平成12年から現職。「花が変える 私も変わる 街も変わる」をキャッチフレーズに「北海道にもっと花を、花文化を」と願いを込め活動中。

夢のある街、幸福の図式。

した観光客の方に、北海道ならではの景色がたくさんあることを伝えられたらな、と思います。

浦井：花新聞というジャーナルが事業性をもって成り立っているのが凄くと思います。北海道の方が、花や緑に対し深く思っている証拠だと思えます。

三國清三：私は増毛の生まれです。ちょうど僕が生まれた時はニシンが絶滅してどん底の貧乏。おやじは手漕ぎの漁師でおふくろが百姓。1日にアワビが1個か2個しかとれないので市場もセリで落としてくれないんです。おばちゃんに料亭に持っていったら？と言われ、料亭の裏口に持っていくとぶんといいにおいがした。「おふくろが獲込んで」と嘘を言つと相場よりも高めに買ってくれたんです。そのころから料理人になろうと思っていました。

スイスなどヨーロッパをまわったんですが、その時驚いたのはとにかく街中花だらけなんです。スイスのジュネーブの大使館のコック長で行ったのですが、スイス時計計てありますよね。花が時計だなんて。花時計の前では、世界中の人が記念写真を撮るんですよ。朝4時くらいにジュネーブ市の掃除の専門家が来て、とにかく町中を掃除するん

です。ヨーロッパでは、ロンドン、パリなど街中がお花畑のような印象があります。札幌の街もスローフードの運動をやってますので、お花畑のようになつたら。高橋知事にお願ひしたいと思えます。世界中の人が見に来て、夢を持つ街にしたいからと思えます。

浦井：確かにジュネーブでもベルンでも美しいというところに誇りを持っています。北海道もそうならいいなと。松本さんはポール・ニューマンがフロリダで始めたボギークリークという、難病の子ども達が自然に親しんで、たとえ3日でも笑顔で過ごせる生活ができるような場所を作るとい運動を個人的におやりになつています。公園緑地の行政のトップでもあるので、北海道のランドスケープを語っていただきたいと思えます。

まさにスローライフ、郷土性・社会性を持つ質の時代へ

松本守：浦井さんがスローフード宣言を読まれた時に、今日は被告の立場で呼ばれたように思いました。会場笑。フードの部分にパークにすると、我々の公園はスピードだけで、量だけを一生懸命作ってきた。その結果日本中の公園は金太郎飴になつて、郷土性はどこにいったんだと言われているような、誰も使わない公園ができたんじゃないか

と言われている気がしまして、ファーストフードにかけて、公園緑地行政を誹謗中傷しているのではないかと思つたんですが、実はおっしゃる通りかなと思つております。まさにスローフード宣言通りであり、心を入れ替えて新たな公園を作つていこうと思つております。また公共だけで公園を作るのではなく、民間の緑化、花作り、街作り等を行政が協力するなど、変化しています。まさにスローライフ、質の時代になつて、郷土性・社会性を持つて進めて行きたいと考えているので、被告人席からの無罪を主張したい！

ポール・ニューマンは難病の子ども達を無料で預かつて家族を解放してあげて、最後の思い出にっこり笑つて天に逝けるような施設を作っています。日本にも作ろうと一生懸命運動しています。人生の帳尻はどこかで合うもので、良いときもあれば悪い時もあり、帳尻を合わせて私も天国に逝きたいと思つたので、役人で悪いことばかりやつていいる分、良い事のボギークリークを作つて帳尻を合わせたいと思つています。同じように自然に対する帳尻合わせのようなこともあるんじゃないかと思つています。自然をなし崩しに壊しながら街や公園を作つたりしてきたので、大地にも帳尻を合わせなければいけないので、自然再生ということで、北海道はポテンシャルがありますから、大地を大切に街づくりや国土づくりができていけばいいと思つています。



三國氏の著作「C'est Mikuni」(料理通信社刊)には、氏のおいしさが満載。



本物の自然とせめぎあう。 本当の文化と、社会の責任。

三國：人は舌の先で甘味を感じて、両脇で酸っぱさを感じて、奥で苦味を感じます。それを開化させるのに、先人はサンマを食べさせたんです。サンマを食べなければ味噌類になると、子どもに言い伝えたんです。今若者は柔らかいものしか食べないので、若いお母さんは味覚を子どもにも教えられない。今の若い人は固いものを噛まないから脳が刺激されない。大人親、社会の責任である。これを食育として脱却するようにしています。本当の自然とか、自然とせめぎあう技術を文化として子ども達が解っているのか。今まで、量的に建設としてやってきたことを、先ほどの幸福感に立ち返って考えてみると、本当に国民、道民、地域の人達の求めるところにアジャストできるように対応をどのようにするのか真剣に考えなくてはいけない。

涌井：花を通して夫婦仲が良くなったたり、子どもと母親が近くなったたりという事例を通して、生き物を愛するとか育てることによって、何か得られると思うのですが。

かとう：夫婦仲が良くなるという一点にしほってお話します(笑)。パーゴラとかアーチとか日曜大工で端材を利用したり、北海道で多いのは公園で伐採した白樺を使ってベンチやテーブルを素敵に作っている庭をよく目にします。お父さんが庭づくりに参加すると子どもがお父さんを見る目が変わったりするんです。普段の仕事は見えないけれど、お母さんにお願ひされてラティスを作っている姿を子どもは後ろから見ていて尊敬するんです。お父さんとお母さんが一生懸命作ったテーブルでジンギスカンを食べたり、庭は家族でまるごと楽しむ場所だなと感じます。遠くのリゾートに行く

のもいいんですけど、毎日楽しむことができるということ。私達花新聞ではカーテンリゾートとして提案しています。

涌井：ここにいる造園の専門家の方々と、そのようなご家族。どんな形で関わり合えますか？

かとう：そういう質問は多いです。幾らぐらいでTVのヒフオーアフターのように庭が変わりますかとか。素人でできる範囲と、無理な部分がありますので、プロの皆さんと手を繋ぐ可能性は十分あると思っています。

美しい国づくり。 観光とランドスケープ。

涌井：北海道のある場所にファーマーズレストランがあつて、その周りに1ヘクタールぐらいの花畑を作っただけでものすごいお客さんが来たという話を聞いたことがあります。家の敷地内に花を咲かせて楽しんでいると、だんだん街の方に向かって花や緑が出ていくと思っんです。観光の原動力は国の光を見るという言葉にあり、そこがいかにか健全で幸せな暮らしをしているかを人々に見せびらかし、こんな生活してみたいなと憧れてそこを見に来ることを観光と言っんです。さきほど三國さんがおっしゃったスイスもいかに自分達がハッピーであるかということ。ランドスケープで示そうとしています。自分達の生きている姿を見せびらかして、自己主張をして交流を巻き込んで高次のサービス産業を作っていくことをやっているかないと、生産拠点が海外に出てしまっているだけに、非常に国づくりに難しい。美しい国づくり大綱の作成が国会で進んでいるようですが、観光という分野で都市や地域が自ら表現するという面では、これからランドスケープの世界でどのよ

うに関わっていきそうなのか、量から質へ公園が変わるように、その展望を教えてください。

松本：郷土性とか風土性に根づいた、また景観という観点でのランドスケープがあります。その土地の有り様を基本にして、街づくり、都市計画を始めていこうと考え方が変わってきている。コルビジエの都市計画とか暮盤の目に作るとか、機能が大事だとかじゃなく、まずは風土性、郷土性を前提としてどういう街を作っていくのか。ランドスケープから街づくりとか都市計画ということになると発言をしない。公園とか緑地だけではなくランドスケープという言葉が大事になっている時代だと思っいます。

涌井：今まで、美しいということは法律や制度には馴染まなかつたと思われれますが、そういうことを目指そうという動きはあるんでしょうか。

松本：景観とか美しさということを公共事業の中心に据えてこれからは仕事をやっていこうということで、間もなく、国土交通省から美しい国づくり大綱というのが出ることになっています。美しいということがすべての中心だということ。国土交通省も被席から降りて無罪放免となるということ(笑)。

涌井：今、日本も美しい国づくりということ。ランドスケープの世界の人間は今こそ活躍できる時代だと言えるのではないかと。北海道に何かアイデアはあるんでしょうか。

かとう：仮称ですが北海道ガーデン博を数年後にやるという動きがあります。札幌市だけで緑化フェアをやるということではなく、全道ツーリズムという、良い場所を季節ごとに追っていくよ



松本 守 (Mamoru Matsumoto)
北海道滝川市出身。
国土交通省大臣官房審議官、昭和47年建設省入省、平成11年
建設省都市局公園緑地課長、平成14年より現職。一貫してわが
国の公園緑地行政を推進役として活躍。



ウェルカムパーティでは、ヨサコイソー
ランリレント舞華軍団のダンスに、北海
道の力強い未来を感じるひととき。



うな新しい形の花のイベントを北海道でだったら
できるんじゃないか、という動きです。そのために
は個人の庭、それが花の街になるようなおもしろ
い取り組みができるかなと思います。

ホスピタリティの公園。 プレジール！という精神と共に。

涌井：花と緑をキーワードにしてネットワークで
博覧会のような催しをするのなら応援したい。工
業化社会の中で物が先にあって事が後からついて
くるというところで、ホスピタリティというのを
忘れてきた気がします。本当のホスピタリティと
は何なのか、消費者が何を求めているのか、豊かに
なる気持ちとはどんなところから生まれてくるのか、
三國さんはそういうところを味、食というものを
通しながら問いかけてきたと思うのですが。

三國：日本人の最も国内で憧れる土地は北海道が
一番だと思います。それは当然でしょう。その後には
チがありまして、二度と行きたくない、行った後に
一番がっかりしたというのも、北海道がナンバ
ーワンです。北海道に来るとまずカニ、イクラ、トウ
キビ；それが山の方に行ってもでてくる。最後は
は下痢をして寝込んで、もう一度と北海道なんか
に行くもんかという話があります(笑)。美しさ
という言葉もそうなんです。スイス、フランスで生
活してみても、食べ物にしてもお花にしても、一言で
いうと「プレジール」あなたのためよという言葉な
んです。フランス語でプレジールというのは喜び
という意味ですが、本当のホスピタリティとは、あ
なたのためにあるんだということ。私は北海道食
大使というのにも任命されていますので北海道の
PRをしますと、北海道の食材というのは、最も安
全で最も健康なんです。6ヶ月間雪に閉ざされ始
ど虫食いだとか害虫が出てこないんです。もとも

と超低農薬なんです。北海道はアピールが半可
臭いんです(笑)。日本一安全な食材、安全な環境な
のに言えないんですね、恥ずかしくて。プレジール
美しさというのを見て喜ぶ、人の為にある。本
当の表現力、ホスピタリティなんです。

涌井：京都の祇園祭では、座敷で国宝級の屏風、坪
庭、中庭を見ている。長崎では芸者を広い庭に置
いて、酒やお茶を振る舞う習慣をいまだにやって
いる。オープンガーデンというのも、まさにプレジ
ールだと思っんです。文明力を示すというよりは、
文化力としてのランドスケープを表現する時代に
なってきたという気がします。プレジールと
いう言葉は、公園にも、松本さんのボギークリーク
の話にしてもいいですね。

松本：北海道みたいな味覚音痴のところにどうし
て三國さんみたいなシエフがいるのかという話な
んですけど、貧しいが故にホヤをたくさん食べて
微妙な味とか苦味を小さい頃に知った事が味覚の
発達に繋がったとおっしゃっていました。公園を
作る時も、苦味とか風土の厳しさを認識した上で
どう表現していくかということだと思えます。さ
つき花博の話がありました。プレジールじゃない
んですが、花、緑をどう見せるかという時代に変わ
っています。新しい緑の世界をどう作るのかとい
うきっかけとして風土の最も厳しい北海道で花の
博覧会をやるということは、良い試みではないか
と感しています。

思いやりの気持ちを込めた、 花の博覧会。

涌井：ぜひ北海道で花の博覧会をやりましょう！
しかも美しさを見せるのではなくてホスピタリテ
イ、思いやりの気持ちを表現できる公園。日本の国

民医療費というのはものすごく財政負担になるん
ですが、そこにお金を使うくらいだったら、むしろ
公園で老人がのびのびと花を楽しむ、生きるとい
うことを慈しみ美しいということを愛する力があ
ると思うので、そうした地域、都市、国づくりをや
らなければ、本当の意味でのホスピタリティはな
いのでは。

かとう：イギリスやニュージーランドの花のフェ
スティバルに読者の皆さんとツアーで行ってみて
思った事は、観光客よりもそこに住む人々が楽し
んでたということがとても印象的でした。北海道
で花の博覧会をしたら、いろんな人が来るんでし
ょうけど、私達が自慢できる花を私達が作って、私
達が楽しむ博覧会ができた方がいいのになと、そん
なイメージを持っています。

涌井：三國さん、そんな博覧会をやったらスロ
ードの観点から応援していただけますか？

三國：もちろんです。食べる花というのは開発で
きないんですか？

かとう：喜茂別のほうではエティブルフラワーを
作っている専門のところがあります。

三國：食べられるバラの花びらを使う菓子職人が
います。全世界でヒットしています。僕が博覧会で
そのレシピを作ったりしてね。

涌井：博覧会は大成功しそうですね！

